

日本語への処方箋

高田宏



日本語への処方箋

ことばの周辺

辞書あれこれ

ことば散歩

書斎のそと

日本
工業
學院
の
蔵
處
方
箋

江苏工業學院圖書館
章



高田
宏

創
拓
社

高田 宏 たかだ ひろし

作家。一九三二年京都市生まれ。石川県に育つ。
京都大学文学部卒業。エッセイ石油広報部に勤務し、『エナジー』『エナジー対話』等の編集に携わる。著書『言葉の海へ』（新潮社）で大佛次郎賞と亀井勝一郎賞、『木に会う』（新潮社）で読売文学賞を受賞。
主な著書に、

『われ山に帰る』（新潮社）
『雪日本心日本』（中央公論社）
『「吾輩は猫でもある」覚書き』（講談社）
『冬の花びら』（偕成社）
『海上の王国』（潮出版社）
『雪古九谷』（光文社）
『雪恋い』（新宿書房）
『もう一度読む』（文化出版局）
『編集者放浪記』（リクルート出版）
『ハケ岳・森の時間』（リクルート出版）
『ふるさと再び』（新潮社）

© Hiroshi Takada

日本語への処方箋

一九九〇年四月一日 第一刷発行

著者 高田 宏

発行者 井吹 晋

発行所 株式会社創拓社

東京都千代田区神田神保町二一三八
稲岡九段ビル六階 〒一〇〇一

TEL 〇三・二八八・七一〇〇
FAX 〇三・二八八・七一六四
振替 東京七 一五八五五〇

印刷 株式会社 精興社

製本 大日本製本株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

万一、落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします

ISBN 4-87138-094-7 C 0095

1990, printed in Japan

日本語への処方箋・目次

日本語への処方箋

目と眼	8
ランドセル劇場	17
「うら」と「うち」	27

ことばの周辺

音ありき	38
字を書くということ	45
闇夜の冒険	51
「わし・ぼく・私」	64
言葉のプロ	68
先生たちの言葉	77
心のメディア	81
固有名詞	84
老婆年齢	87
「思い」という流行語	93
対話に教えられたこと	97

辞書あれこれ

筆とれば物書かる	100
庶民の読書	102
唇	109
禁煙	111
恋文	114
言葉地獄	120
文士の筆跡	123
なんでもないこと	127
プエルトリコの国際ペン大会で	133
日本語の近代	137
本物の日本語を知る	146
望郷・島巡り	149
師の書物	163
乾いた砂と濡れた砂	170
反辞書	180
大言海の誕生	186

言　　海	196
新しい『大言海』	198
大辞林	202
ノア・ウェブスターと大槻文彦	206
HRAFの分類表	210
ことばへの情熱	213
質屋がよいのプチ・ラルース	217
辞書を読む楽しさ	221
歴史的仮名遣い	224
知里真志保の生涯	226
怪物の腹の中	228

ことば散歩

だんな	238
女性の気力	240
かわいさ	242
美しい死顔	244
さんりんぼう	246

書斎のそと

自動ドア	248
本はどうも	250
旅と移動と	252
一気呵成	254
団子より花	256
同居者	258
笑顔の朝	260
ヘッドホンの洩れ音	262
たたみの生活	264
断食について	266
職人になりたかったら	268
甘辛両党	270
おばあちゃんの帽子	272
ふるさとの言葉	274
鳥の声をきく	276
明朝体の行方	280

性、性差、エロス	282
町の緑	284
実験誌	286
山の民、海の民	288
ミスター・ミウラ	290
都会の赤トンボ	292
あとがき	295

日本語への処方箋

目と眼

先日、書き下ろしの作品を一冊、脱稿した。三百枚あまりの小さなのだが、四年がかりの仕事だった。資料調べなど準備に手間どったためでもあり、また、扱った世界の像が見えてくるのに時間がかかったせいでもあったが、一つには、江戸初期という時代の手ざわりが初めのうちはつかみにくかったのだった。

江戸時代でも幕末なら前に扱ったことがあり、いくらか見当がつく。だが今度の作品では、およそのところ寛永から寛文にかけての十七世紀中頃が、物語をつつむ時代である。元禄以前のこの時代を思い描くには、古い資料の細部に目をこらさなければならなかった。すっかり頭に入れたつもりの資料にもう一度目を通す。すると前には気づかなかった細部が見えたりする。その繰り返しでようやく私なりの感触をつかむ。蝸牛の歩みである。生来の怠け癖も手伝って、思いがけず年月がかかってしまった。

ところでこの作品を書いて、頭に浮かんでくる言葉を打ち消さなければならぬことが、ときどきあった。一つだけ例をあげれば、「空氣」である。

たとえば、「空氣が重くよどんでいた」とか、「乾いた空氣が肌に心地よい」といった文章は、今ならごくありきたりのものである。しかし、江戸初期の物語を語るのに、それでいいだろうか。

「空氣」という語がいつから使われるようになったのか詳しいことは知らないけれども、この語の裏には近代科学による自然環境の認識があるだろう。私たちを取りまいているこの見えない物質を「空氣」とか「大氣」とか名付けたのが、山脇東洋や杉田玄白の時代よりはるか以前とは思えない。それどころか、田夫野人^{でんぷやじん}までが「空氣」という語を口にするようになるには、おそらく明治以後の近代初等教育の普及を必要とするだろう。

明治中期の国語辞書『言海』には、

くうゝき(名) 空氣 地球ノ周ヲ^{イナ}囲メル大氣、動ケバ即チ風トナルモノ、動植物、皆此中ニ生存ス。霧^{キリ}空氣。

という説明がある。すくなくともここにあるくらいの自然科学の知識を背景にしなければ、「空氣」という語は実体を持たない。ただしこの説明で今の辞書に見られないのは、「動ケバ即チ風トナルモノ」というところである。『言海』という辞書には大槻文彦という強い個性が流れているのだが、そのためだけではなく、「風」という昔から誰もがよく知っている語によって「空氣」を説明しなくてはならなかったのではないか。明治中期の辞書ではそれがまだ必要であったのではないか。

今日の私たちは、「空氣」を日常語として使っている。酸素と窒素の混合比がどれだけであるかはすぐには答えられなくても、それが地球をつつんでいる無色透明の気体であり、私たちがそれを吸って生きていることをじゅうぶん知っているからである。

江戸初期の人びとに、その知識はなかったはずである。まして私が扱ったのは、江戸初期の北陸の山村に生きる人びとである。「空氣」という、近代自然科学を背後に持っている語を持ち出すのは、その物語にふさわしくないだろう。「空氣が重くよどんでいた」とも、「乾いた空氣が肌に心地よい」とも、書くわけにはいかない。「空氣」の代わりの言葉となると「風」しかないのだが、「空氣」を単に「風」に変えるだけでいいというものでもない。木の葉の動きとか汗のかきかたとか、何かしら別のことで表現しなくてはならないこ

とが多くなる。つまり、近代自然科学が私たちに染みつく前の認識にもどってみなくてはならない。書きはじめてみて、そのことが私には意外でもあり、また面白くもあったのだが、面倒なことに、途中まで書いて何日かして再び物語にもどるときには、そのたび頭を切り換えるための時間がかかった。物語から離れているあいだに私のなかの言葉がおのずと現代にもどってしまったているからだ。た。「空気」を日常語とする現代日本語の世界が私のなかにもどってしまったている。

もちろん、江戸初期の山村を描くのには、すべての言葉をその時代のその土地の言葉にするわけにはいかない。まず書き手の私にそれは不可能なことであり、また、もしその書きかたができたとしても、それでは読み手にとってもほとんど読めないものになる。だが、だからといって、江戸初期の山村の人間を、現代の日本語をまるごと使って描いていいとは言えない。とりわけ「空気」のような、近代の自然科学を前提にするような言葉は使えないと思う。思う、というより、書いていてそう感じる。

歴史小説を現代の世界観で描く書きかたがある。それはそれでかまわない。歴史に素材をとった現代小説として読めばいいだけのことである。しかし、過去の或る時代に生きた人間をその時代のなかで描こうとするならば、それでは困るだろう。作品のなかの人間が、

「空氣」という言葉を日々に口にし、頭でも考えているなら、その人間はその時代からはみだしてしまふ。それだけでなく、その人間を描く作者が地の文章で「空氣」を使うとしても、そのとき作者はその人間とは別の世界にいることになる。「空氣」を許容するなら、物語はその時代の物語ではなく現代の物語となる。すくなくとも近代自然科学以降の世界の物語となる。そのとき物語のなかの人物たちは、その時代の人びとの思考と行動から離れてゆくだろう。おそらく、人物たちの生と死のありかたすらが変わってしまうだろう。つまり、物語の根幹が変わってしまうということである。

*

言葉は辞書のなかでは五十音順なりなんなりで一つ一つが独立しているけれども、現実にはどの言葉一つも、それを使う人間のなかでは他の言葉と複雑にからみあっている。私には私という人間の、ほかの人とはちがう言葉のからみあいがある。もちろん大まかには現代日本語の枠のなかにあるのだが、そのなかで、私なりの言葉の組み合わせがあるということがある。そして、それは私の生きかたと切り離すことができない。

これも小さな例で言うなら、私は「眼^め」という字はめったに使わない。あるいは、使え

ない。たいていは「目」を使っている。「眼が光る」と書くのと、「目が光る」と書くのでは、ずいぶんちがうという気がするのだが、その上で、「眼が光る」とは書く気になれなくて、「目が光る」のほうを選ぶことが多いのだ。

私は「眼」というと、眼球そのものが強く感じられてしまう。病院の眼科というときの気持ちである。つまり近代医学が扱う眼であり、そこには水晶体だとか虹彩だとか視神経だとかが一連の語としてくっついていて、視力検査ではかられる視力というものもある。そんなことは気にしなくていいという人もいるだろう。だが一方に「目」という字がある。これなら私は眼科の医者进行い出さなくてすむ。「目を開ける」のも「目を閉じる」のも近代医学のお世話にならないでいい。眼球の構造や機能をちりりとも思ひ出さなくていい。

小説やエッセーを読んでいて、「眼のきれいな人」などと書いてあると、私は妙に即物的に感じて、どきりとする。「切れ長の眼」などというのを見るとなおさらである。まあ、読者をどきりとさせるためにわざわざ「眼」を使っているならいいのだが、たいていはそうではない。一種の気どりとでも言ったらいいいだろうか。「目」では古くさくて、「眼」だと新しいという感じがあるらしい。「目」はあいまいで、「眼」は正確という判断もはたらい

ているようだ。

やはり「眼」の背後に、近代科学があるからだろう。ただし、「眼」という文字そのものが新しいわけではない。漢和辞典を引いてみれば、『史記』のような古い時代の書からの用例もあれば、杜甫の詩にある「分明在眼前」といった詩句も出てくる。けれども、現代の日本語で「目」を使うか「眼」を使うかということになると、「眼」の背後にある近代科学を無視できないであろう。近代合理主義の物の見方が、そこに横たわっているだろう。「眼」を使う人がいちいちそんなことを思っているわけではないけれども、文字の背後にはそれがあると思う。

私の場合は、近代科学や近代合理主義への反撥ないしは不信がある。不快と言いかえてもいい。なるべくならそういうものに縛られない言葉を使いたい気がある。だから、おのずと「眼」はめったに書かないということになる。私には「目」のほうが落ち着くのだ。古くさく見えるかもしれないが、それでもかまわない。

似たようなことと言えば、私は「太陽の光」とは書きにくい。とくに意図して使うのでなければ、「太陽」は使わない。「日の光」と書く。あるいは「光」とだけ書く。または「光」も使わないで、たとえば木の葉か何か、光を受けている物の様子などで書く。